

進展する中国とロシアの軍事協力

——共同軍事演習の多様化と高度化

地域研究部中国研究室 室長 飯田 将史

はじめに

ロシアがウクライナへの侵攻を開始するわずか 3 週間前に、中国の習近平国家主席は北京でロシアのプーチン大統領と会談を行った。この会談で習近平主席は、深刻かつ複雑に変化する国際情勢に直面するなかで、中国とロシアが「背中を合わせて戦略的協力を深化させ、肩を並べて国際的な公平と正義を守ることを固く誓っている」と指摘した上で、「これは中露両国と世界に深遠な影響を及ぼす戦略的な選択であり、過去、現在、将来において揺らぐことはない」と言明した。そして両国が共に「外部からの干渉と地域の安全保障上の脅威に有効に対応し、国際の戦略的な安定を守るべきだ」と主張した¹。さらに両者の会談後に発表された中露共同声明では、両国が「NATO の継続的な拡大」と「アジア太平洋地域における閉鎖的な同盟システムの構築」に反対することが明記された。また共同声明は、「中露の新型国家関係は、冷戦時代の軍事・政治同盟関係モデルを超越している」と指摘するとともに、「両国の友好には限界がなく、協力にはタブーもなく、第三国と国際情勢の変化にも影響を受けない」と主張したのである²。

このようにロシアとの戦略的な協力を極めて重視している中国は、ロシアとの軍事面での関係も強化しつつある。中国人民解放軍によるロシア軍との共同軍事演習の実施はその重要な一環である。両国軍は 2003 年に初めて共同演習を行ったことを契機に、二国間・多国間の共同演習を継続的に実施してきた。同時に近年では、新たな共同軍事演習や共同パトロールを開始するなど、その頻度や範囲を拡大させる傾向が見られる。ルールに基づいた既存の国際秩序に対抗する中国とロシアの軍事面での関係強化は、既存の国際秩序の維持に国益を有する各国の安全保障にとって大きな影響を及ぼし得る。中露の共同演習は地理的に東アジアで行われることが多いため、日本の安全保障にとってとりわけ懸念がもたれる状況となっている。本稿では、中国によるロシアとの共同軍事演習について経緯と現状を整理したうえで、その傾向や中国側の意図を分析する。最後に、今後の中露の共同軍事演習の方向性と、東アジアの安全保障に対する含意について検討したい。

1 平和使命（Peace Mission）共同演習

人民解放軍とロシア軍は、上海協力機構（SCO）の下でのテロ対策演習として、2003 年 8 月に初めての共同演習を実施した。中露両国に加えてカザフスタン、キルギス、タジキスタンが参加したこの多国間演習は、カザフスタンと中国の新疆ウイグル自治区との国境付近で行われ、中国軍からは歩兵や砲兵、武装警察部隊など兵員 700 人ほどが参加した。

この演習を基礎にして、2005 年から SCO による対テロ共同演習として「平和使命（Peace Mission）」共同演習が定期的に行われるようになった。初めての「平和使命」共同演習となった「平和使命 2005」は、2005 年 8 月に中国とロシアが参加してウラジオストクと山東半島で実施された。双方から戦闘機や艦艇、戦車、装甲車などが動員され、兵員 9,800 人が参加した。2 回目となる「平和使命 2007」は、ロシアのチェラビンスクで実施され、中露に加えてカザフスタン、キルギス、タジキスタン、ウズベキスタンが参加した。中国軍からは戦闘爆撃機やヘリコプター、輸送機などが動員され、兵員 1,600 人ほどが参加した。その後も「平和使命」共同演習は 1～2 年に一回の頻度で開催されており、中露による二国間演習として行われる場合と、その他の国も参加する多国間演習として行われる場合とがある。「平和使命」共同演習は、これまでに 10 回実施されている。

新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けて、3 年ぶりの開催となった「平和使命 2021」は、2021 年 9 月にロシアのオレンブルグ州で実施された。「平和使命 2021」には中露に加えてインド、カザフスタン、キルギス、パキスタン、ウズベキスタン、タジキスタンが参加し、ベラルーシがオブザーバー参加した。参加した兵員総数は約 4,000 人であり、中国からは北部戦区の部隊を中心に兵員 550 人余り、車両 130 台余りが派遣された。「平和使命 2021」について中国国防部の呉謙報道官は、共同の作戦指揮センターと部隊指揮部の設置を通じて、戦略面と戦術面の双方における各部隊の共同作戦を円滑に展開できたことや、無人機による攻撃への対抗を演習項目に新たに加えたことなどを指摘した上で、「国際的なテロリズムの脅威に共同で対応する決意と能力を向上させた」と高く評価した³。

「平和使命」共同演習の特徴としては、以下の 3 点を指摘できる。第 1 は、演習が定期的かつ継続的に実施されていることである。2005 年から 2021 年までの 16 年間に 10 回開催されており、頻度はおよそ 1 年 7 カ月に 1 回となっている。第 2 は、開催される場所が多様なことである。主要な参加国である中国とロシアにおいてだけでなく、カザフスタン、タジキスタン、キルギスでも開催されており、中国とロシアにおいても開催場所は変化している。第 3 は、参加国が増加していることである。「平和使命 2018」にはインドとパキスタンが初めて参加した。「平和使命 2021」にはベラルーシがオブザーバー参加した。2015 年 7 月にインドとパキスタンは SCO に正式加盟し、ベラルーシはオブザーバー加盟している。近

年、SCO への加盟を目指す国が増加しており、今後はより多くの SCO 加盟国が「平和使命」共同演習に参加することが想定される。

中国が「平和使命」共同演習に積極的に参加を続ける狙いとしては、少なくとも以下の 3 点を指摘することができるだろう。第 1 は、中国が自国の安全保障上の課題としている、国際的なテロリズムに対する抑止力を高めることである。中国は中央アジア諸国におけるイスラム過激主義が新疆ウイグル自治区におけるテロリズムに影響を与えることを懸念しており、「平和使命」共同演習を通じて中央アジア地域におけるテロリズムへの抑止力を高めるとともに、人民解放軍のテロ対処能力の強化も図っていると考えられる⁴。第 2 は、ロシアや中央アジア諸国の演習場へ部隊を展開させることで、人民解放軍の戦力投射能力の強化につなげることである。中国の部隊は車両による輸送だけでなく、鉄道や航空機も利用し開催国まで輸送されており、とりわけ「区域防衛型から全域作戦型への転換」⁵を目指す陸軍にとって、遠方への機動展開能力を強化する機会を提供しているといえるだろう。第 3 は、中央アジア諸国における中国に対する評価を高めることである。中央アジア諸国にとって大きな課題となっているテロリズムへの対抗において中国が役割を果たす姿勢を示すことで、中国と中央アジア諸国の関係の強化が期待されているのである⁶。

2 海上連合（Joint Sea）共同演習

中国海軍とロシア海軍は 2012 年 4 月に、海上における共同防衛と海上交通路の共同護衛作戦をテーマとした初めての共同軍事演習を、「海上連合 2012」として山東省青島沖の黄海において実施した。中国側は、北海艦隊、東海艦隊、南海艦隊から駆逐艦、フリゲート、補給艦、病院船など艦艇 16 隻、通常動力型潜水艦 2 隻、航空機 13 機、ヘリコプター 5 機を動員し、参加兵員は約 4,000 人に上った。ロシア側は、巡洋艦、駆逐艦、補給艦など水上艦艇 7 隻、ヘリコプター 4 機を動員し、およそ 6,000 人の兵員が参加した。6 日間にわたって行われた「海上連合 2012」では、中露両国の海軍による共同の船舶護衛、防空戦、対潜水艦戦、犯罪者制圧、搜索救難などの項目と対海上、対水中、対空中の実弾射撃訓練が行われた⁷。

「海上連合 2012」の中国側の統裁官を務めた海軍副司令員の丁一平中将によれば、演習の目的は①中露の全面的戦略協力パートナーシップを発展させること、②両国海軍間の実務協力を深化させること、③両国海軍が海上における共同軍事行動によって安全保障上の脅威と挑戦に対応する能力を高めること、④地域の海上の平和と安定を守る両国海軍の自信を強化することだとされた⁸。

その後、「海上連合」共同演習は 2018 年と 2020 年を除いて毎年開催されている。開催される海域は多様であり、「海上連合 2013」はウラジオストク沖の日本海、「海上連合 2014」は上海沖の東シナ海、「海

上連合 2015（前段）」は地中海・黒海、「海上連合 2015（後段）」は日本海、「海上連合 2016」は南シナ海、「海上連合 2017（前段）」はバルト海、「海上連合 2017（後段）」は日本海・オホーツク海、「海上連合 2019」は黄海、「海上連合 2021」は日本海、「海上連合 2022」は東シナ海で行われた。開催海域は中国および極東ロシアの近海が多いものの、地中海やバルト海などヨーロッパ正面に中国の艦艇が進出して行われている点が注目される。

「海上連合」共同演習の内容には多様化と高度化の傾向が見られる。11 回目の「海上連合」共同演習となった「海上連合 2022」は、2022 年 12 月に東シナ海で行われた。中国側は、東部戦区と北部戦区の家軍から駆逐艦、フリゲート、補給艦など水上艦艇 6 隻に加えて、潜水艦、早期警戒機、対潜哨戒機、艦載ヘリコプターなどが参加した。ロシア側は、巡洋艦や駆逐艦など水上艦艇 4 隻が参加した。この演習では、ある地域で軍事的な緊張が発生した状況の想定の下で、中露海軍が共同で混成部隊を編成して、海空戦力による援護の下で共同の海上行動を展開することにより、地域の平和と安定を守ることを目標として、共同の封鎖作戦、臨検・拿捕、共同の防空戦、対潜水艦戦、搜索救援といった多様な科目を訓練したとされる⁹。また、中露の艦艇は事前に演習海域に集結したり、港湾での事前協議などを経ずに、それぞれ演習海域に本国より直接到着し、即時に訓練を開始する方式を採ったという¹⁰。「海上連合」共同演習には、両国海軍による共同作戦内容の烈度が高まり、即応性が向上するといった注目すべき進展が見られる。

「海上連合」共同演習における中国側の狙いとしては、第 1 に中国近海から遠く離れた遠海において実戦的な訓練を行う機会を得ることであろう。地中海で行われた「海上連合 2015（前段）」においては安全航行、洋上補給、護衛任務、実弾訓練などの演習が行われ、中国側は自国から遠く離れた海域における作戦遂行の経験を得ることができた¹¹。第 2 は、演習の実施を通じて、それぞれの重要な利益に関して相互に支持する姿勢を国際的に顕示することである。「海上連合 2016」は 2016 年 9 月に南シナ海で実施されたが、同年 7 月には国際仲裁裁判所から南シナ海で中国が主張する権利を否定する判断が示されており、この判断に反対する中露の協調を示すことが目的とされていたといえるだろう¹²。「海上連合 2017（前段）」で、ロシアが欧米諸国との摩擦を強めているバルト海で中露が共同演習を実施したことも、中国がロシアとの協調関係を顕示することを目的の一つとしていたといえよう¹³。

3 戦略的軍事演習への相互参加

2005 年からの「平和使命」共同演習、2012 年からの「海上連合」共同演習を定期的実施することで協力関係を次第に深化させてきた人民解放軍とロシア軍は、2018 年にさらなる関係の強化に向けた大き

な一歩を踏み出した。同年 9 月にロシアが実施した戦略演習「ヴォストーク 2018」に人民解放軍が初めて参加したのである。ロシア軍は、大規模かつ烈度の高い戦争への対応を想定した戦略的な軍事演習を毎年実施しており、実施場所を 4 つの軍管区での持ち回りとし、それぞれ「ヴォストーク（東）」（東部軍管区）、「ツェントル（中央）」（中央軍管区）、「カフカス（コーカサス）」（南部軍管区）、「ザーパド（西）」（西部軍管区）と呼称している¹⁴。この戦略演習には、それまで集団安全保障条約機構（CSTO）に加盟しているロシアの同盟諸国が参加してきたが、「ヴォストーク 2018」にはロシアと同盟関係にはない中国が参加したのである。

中国は「ヴォストーク 2018」に東部戦区、中部戦区、海軍北海艦隊を中心に兵員およそ 3,200 人、各種車両およそ 1,000 台、固定翼機とヘリコプター合計 30 機を参加させた。参加した兵員と装備品は、14 日間をかけて鉄路と空路によって演習場まで輸送された。人民解放軍が国外において行われる軍事演習に派遣する兵員・装備の規模としては、史上最大になったとされる¹⁵。演習の内容は、「平和使命」共同演習が主たる項目としてきた対テロ演習に加えて、共同の防衛や反撃といった伝統的な項目も含まれる形に拡大し、「平和使命」共同演習に比較して「演習のレベルがさらに高く、規模がさらに大きく、要素がさらに揃い、共同性がさらに高く、中露双方の政治的・戦略的な相互信頼と軍事的な協力水準が歴史的に新たな高みに達したことを示している」と評価された¹⁶。演習 2 日目には、前日にウラジオストクで習近平主席と会談したばかりのプーチン大統領が視察に訪れ、中国の魏鳳和国防部長と共に閲兵を行った。魏鳳和部長は挨拶で「今回の演習は、共同で地域の平和と安全を全力で守る中露の決意と自信を体現し、様々な安全保障上の脅威に対応する両軍の能力を向上させた」と指摘した¹⁷。従来の「ヴォストーク」演習における仮想敵の一つが中国とされていたことから見れば、中国軍による「ヴォストーク 2018」への参加は、中国がロシアにとって「友軍」になったともいえるものであり¹⁸、中露両国と両軍の関係が飛躍的に強化されたことを示していると評価できよう。

その後、人民解放軍は「ツェントル 2019」、「カフカス 2020」とロシアの戦略演習に引き続き参加したが、2021 年には新たな展開が見られた。ロシア軍が行った「ザーパド 2021」に人民解放軍は参加せず、人民解放軍が行った戦略演習である「西部・連合 2021」に、ロシア軍が初めて参加したのである。両軍から合わせて 1 万人余りの兵員が参加し、多様な航空機や火砲、装甲車などが動員され、寧夏回族自治区の青銅峡訓練基地で実施された「西部・連合 2021」では、両軍の部隊からなる混成部隊が編成されるとともに、両軍が同じ指揮統制システムを通じて部隊を指揮するなど、従来のレベルを大きく上回る共同運用を実現したという。また、ロシア軍部隊は中国陸軍の武器や装備も使用しつつ、中国側が企画立案した作戦計画の下で、偵察・早期警戒、電子・情報攻撃、打撃・殲滅などの能力を共同で強化したとされる¹⁹。中国国防大学の姚磊らによれば、「西部・連合 2021」では中国側が主導的な役割を果たしたことにより、中露の共同が表面的なものから深く融合したものへと変化すると同時に、演習の内容が戦場にお

ける情報や電磁のコントロールといったレベルにまで達したことにより、「中露両軍の戦略的な信頼と深い共同が新たな水準に達した」と評価されるのである²⁰。

2022 年 2 月 24 日に、ロシア軍はウクライナへの大規模な侵略を開始したが、その際にウクライナに面した西部軍管区とベラルーシからウクライナへ進軍した部隊の多くは、「ザーパド 2021」に参加するために動員され、演習後も展開を続けていたものであった²¹。ウクライナに侵攻したロシアに対する国際的な批判が高まり、西側諸国を中心にロシアに対する制裁が強化される中で、ロシア軍は同年 8 月末から「ヴォストーク 2022」を実施した。この演習に中国は、ベラルーシやインドなどと共に参加した。ロシア軍による「ヴォストーク 2022」への参加兵員数は 5 万人程度であり、30 万人程度に達した前回の「ヴォストーク 2018」に比べて大幅に縮小したが、人民解放軍は兵員 2,000 人余り、車両 300 台余り、固定翼機とヘリコプター合計 21 機に加えて艦艇 3 隻を参加させた²²。ロシアが戦略演習を口実にウクライナへの侵攻兵力を動員したことや、ロシア軍による侵略と非人道的行為などが国際的に強く非難されていることから判断すれば、人民解放軍が「ヴォストーク 2022」に参加したことは、ウクライナ戦争に拘わらずロシア軍との関係の強化を推進するという中国の明確な意思を示したものといえるだろう。人民解放軍は従来と同等規模の戦力を「ヴォストーク 2022」に参加させただけでなく、ロシアの戦略演習に初めて海軍艦艇も参加させた。中国海軍の艦艇 3 隻は、ロシア海軍の艦艇 3 隻と共に日本海で実弾射撃を伴う訓練や、共同で宗谷海峡を東進してオホーツク海に展開する航行などを行った²³。

人民解放軍がロシアとの戦略演習への相互参加を進める狙いとしては、少なくとも次の 2 点を挙げることができるだろう。第 1 は、軍の統合的な指揮と運用において多くの経験を有しているロシア軍との共同演習のレベルを上げることで、自らが進めている国防・軍隊改革の課題である統合運用能力の強化に役立てることである。ロシア軍は軍管区への指揮権限の委譲や、大隊を中心とした部隊運用などの軍改革を 2000 年代末ごろから推進しており、また南オセチア紛争やシリア紛争などでの実戦経験も豊富である。2015 年末から国防・軍隊改革を進めている人民解放軍にとって、ロシア軍の改革から学べる点は多いだろう。「ヴォストーク 2018」に参加した人民解放軍部隊の指揮官である邵元明・統合参謀部副参謀長は、「ロシア軍は実戦経験が豊富であり、作戦能力も高いため、ロシア軍の作戦と訓練における有益な経験は我々が参考として学ぶに値する」と率直に指摘していた²⁴。第 2 は、高まる米国との戦略的競争に対応するために、軍事面を含めたロシアとの戦略的な協力関係を一段と強化することである。中国にとってみれば、「ヴォストーク」演習に参加することでロシアとの相互不信感の払しょくを図るとともに、「ツェントル」「カフカス」「ザーパド」に参加することで米国やその同盟諸国などに対して中露の結束を誇示することが可能となる²⁵。中国が開催した「西部・連合 2021」で、ロシア軍に中国の武器や装備を使用したことにも、ロシア軍との信頼関係を強化する人民解放軍の狙いがあるといえるだろう。

4 共同パトロールの実施

人民解放軍とロシア軍は、「平和使命」に始まって「海上連合」、戦略演習への相互参加と共同演習を質と量の双方で強化してきた。さらに両国軍は 2019 年 7 月に、新たな共同行動を開始した。7 月 23 日に、中国軍の H-6 爆撃機 2 機と、ロシア軍の TU-95 爆撃機 2 機が、日本海から対馬海峡を経て東シナ海に至る空域を共同で飛行したのである。また同時に、ロシア軍の A-50 早期警戒管制機が竹島の日本領空を侵犯する飛行も行った²⁶。この空域で初めて行われた中露の爆撃機による共同飛行について、中国国防部の任国強報道官は記者会見でその実施を確認したうえで、中露両国の空軍が初めてとなる「共同空中戦略パトロール（聯合空中戦略巡航）」を行ったと主張した。そして、今回の共同空中戦略パトロールが「両国軍の戦略的協力の水準と共同行動能力を高め、両国軍の戦略的信頼をさらに深め、様々な安全保障上の脅威に対して両国軍が共同で対応する能力を強めた」との認識を示したのである²⁷。

その後、人民解放軍とロシア軍は、それぞれの爆撃機による共同戦略パトロールを繰り返すようになった。これまでに 2020 年 12 月 22 日、21 年 11 月 19 日、22 年 5 月 24 日、22 年 11 月 30 日、23 年 6 月 6～7 日に中露の爆撃機が日本周辺での共同飛行を行っている。20 年 12 月の共同飛行では、中国軍の H-6 爆撃機 4 機と、ロシア軍の TU-95 爆撃機 2 機が参加した。21 年 11 月の共同飛行では、H-6 爆撃機 2 機と TU-95 爆撃機 2 機が参加し、日本海と東シナ海に加えて、沖縄本島と宮古島の間を通過して太平洋まで展開した。22 年 5 月の共同飛行では、H-6 爆撃機 4 機と TU-95 爆撃機 2 機が参加し、日本海と東シナ海を飛行したのちに太平洋へ長距離の飛行を行った。22 年 11 月の共同飛行では、H-6 爆撃機 2 機と TU-95 爆撃機 2 機が日本海から東シナ海、太平洋にかけて長距離飛行するとともに、中国の J-16 戦闘機 2 機がその護衛についた。また、護衛任務を行った J-16 に対して H-20 空中給油機が給油を行ったと報じられている²⁸。さらに中露の爆撃機はそれぞれ相手国の飛行場に着陸したとも報じられており²⁹、両国軍による共同空中戦略パトロールの内容には着実な深化が見て取れる³⁰。23 年 6 月 6 日には、中国の H-6K 爆撃機 2 機とロシアの TU-95 爆撃機 2 機が、東シナ海から日本海にかけて共同飛行した。翌 6 月 7 日に行われた共同飛行では、中国軍の H-6K 爆撃機 2 機とロシア軍の TU-95 爆撃機 2 機がともに中国本土から東シナ海を経て太平洋へ進出し、再び東シナ海へ至ったのちに、中国機は中国方面へ、ロシア機は対馬海峡を経て日本海へ向けて飛行した。その間、東シナ海上空では計 15 機の中国戦闘機も飛行した³¹。中国側は、中露による共同パトロールは定例化されたと主張しており、中露の爆撃機による共同飛行は今後も継続され、頻度が増していくことも想定されよう。

爆撃機による共同飛行だけでなく、海上においても人民解放軍とロシア軍の共同行動が新たにみられるようになった。先述したように、2021 年 10 月に中国とロシアの海軍は「海上連合 2021」を日本海に

において実施した。この演習が終了したのち、中国の艦艇 5 隻とロシアの艦艇 5 隻が共に、日本海から津軽海峡を通過して西太平洋へと進出した。その後、両海軍の艦隊は様々な訓練を行いながら太平洋を南下して伊豆諸島近海まで到達し、さらに大隅海峡を通過して東シナ海へと航行した。中露の海軍艦艇は、日本の周辺海域を半周するような共同航行を行ったのである。この航行について『解放軍報』は、中露海軍が初めての「海上共同パトロール（海上聯合巡航）」を行ったとし、その目的を両国の全面的戦略協力パートナーシップを強化し、両国海軍の共同行動能力を高めて、国際と地域の戦略的安定を守ることだと主張した³²。

中露の海軍艦艇による日本周辺海域での共同航行は、その後も継続されている。2022 年 6 月半ばから 7 月初めにかけて、中国の艦艇とロシアの艦艇が、北海道周辺海域から太平洋を経て、南西諸島を通過して東シナ海に至る航行を行った。明確な共同の航行ではなかったが、ほぼ同時期に同方向へ航行しており、7 月 4 日には尖閣諸島の日本の接続水域にロシアの艦艇と中国の艦艇が相次いで入域する航行を行った³³。さらに同年 9 月には、先述した「ヴォストーク 2022」に参加した中国海軍の艦艇 3 隻とロシア海軍の艦艇が、それぞれ日本海から宗谷海峡を経て太平洋へ進出し、伊豆諸島の間を通過して西進したのち、9 月 28 日から 29 日にかけて大隅海峡を共同で航行して東シナ海へと展開した。この共同航行についてロシア国防相は「共同哨戒」を行っている」と公表したが³⁴、中国側は公式にコメントを発表することはなかった。中国がこの共同航行を「海上共同パトロール」として喧伝しなかった理由は不明であるが、中露海軍艦艇による日本周辺海域での連携行動が増加傾向にあることは明らかである。

2023 年 7 月 20 日から 23 日にかけて、中国軍の北部戦区が日本海において「北部・連合 2023」演習を実施し、ロシア海軍もこれに参加した。この演習には中露双方から 10 隻余りの艦船と 30 機余りの航空機が参加し、共同の指揮の下で対潜水艦戦や対空戦などの訓練を行った。その後、中国の艦船 5 隻とロシアの艦船 5 隻が宗谷海峡を通過してオホーツク海へ進出した。この両国艦艇の航行について中国国防部は、両国海軍の艦船が「太平洋西部と北部の関連海域において海上共同パトロールを実施する」と説明した³⁵。国防部はこの海上共同パトロールを「3 回目」としており、2022 年 9 月の中露海軍による共同航行が 2 回目の海上共同パトロールだったことを間接的に確認したものと見えるだろう。その後、中国の情報収集艦 1 隻を加えた 11 隻からなる中露艦船の編隊はベーリング海に進出し、アラスカ沖の海域で対潜水艦戦などの訓練を実施したとみられる³⁶。さらに、中露艦船の編隊は日本周辺の太平洋を南下し、南大東島の南方を西進して、沖縄本島と宮古島の間を抜けて東シナ海へと至った³⁷。

人民解放軍がロシア軍と空中と海上での共同パトロールを推進する狙いは、両国軍の関係をさらに強化するとともに、ルールに基づく既存の国際秩序を維持するために協力関係を強化している日本と米国をけん制することにあるだろう。中露が 3 回目の共同空中戦略パトロールを行った直後の 2021 年 11 月

23 日に行われた、魏鳳和国防部長とロシアのショイグ国防相との会談では、両国が共同演習で挙げた成果が高く評価された。さらに両者は、中露両軍が戦略的演習と共同パトロールにおける協力を引き続き強化して、両国の核心的利益を守っていく方針で一致した³⁸。中露が 4 回目の共同空中戦略パトロールを実施した 2022 年 5 月 24 日には、日本、米国、オーストラリア、インドからなる QUAD の首脳会議が初めて東京で開催されていた。中露による共同パトロールの実施は、QUAD を推進する日米に対して強い警告を発する目的があったと見ていいだろう。

5 今後の展望と東アジアの安全保障への含意

2003 年のテロ対策を目的とした二国間共同演習に始まり、2005 年以降の SCO の枠組みでの「平和使命」を中心としたロシアとの共同演習を推進した中国側の期待は、ロシアおよび中央アジア諸国との国境地帯におけるテロリズムを抑止すると同時に、陸上国境を接する軍事大国であるロシアとの相互理解と相互信頼を深めることで安定した関係を構築することにあったといえるだろう。「平和使命」を通じて醸成された中露両軍間の信頼が、海上における共同演習「海上連合」の開始にもつながったと思われる。ところが 2000 年代後半に入ると、中露の共同軍事演習にみられたテロ対策や相互の信頼醸成といったいわば「内向きの性質」が、中露にとって共通の課題となった米国に対して共同で対抗する姿勢を顕示する「外向きの性質」へと変化を見せるようになった。こうした変化を可能にした重要な要因は、共同軍事演習の積み重ねによって醸成されてきた中露両軍間の信頼関係であろう。人民解放軍とロシア軍が戦略的演習に相互に参加するようになったことは、中露の安全保障面での相互信頼が極めて高いレベルにまで達したことの証左である。

中国は 2014 年から南シナ海の軍事化を進め、ロシアは 2014 年にクリミアを併合するなど、中露両国は 2010 年代半ばごろより、米国や西側諸国との関係を悪化させてきた。中露の相互信頼がかつてなく高まる一方で、中露が共に米国との対立を強める状況は、中露の共同軍事演習に、米国に共同で対抗するというメッセージを発する新たな役割を与えることになった。その最たる実例が、2019 年以降繰り返されている中露による共同パトロールである。中国が米国との間で大国間競争に突入し、ロシアがウクライナ戦争で欧米との対立を決定的にする中で、今後は中露が米国や西側諸国への対抗を目指して、共同軍事演習と共同行動をさらに拡大していくことが想定される。一例としては、中露の共同軍事演習への参加国を拡大することで、米国などへの対抗姿勢を強化することが挙げられよう。2019 年 11 月に、中国、ロシア、南アフリカ海軍は、ケープタウン沖で初めてとなる共同軍事演習を行った³⁹。これら三か国は、2023 年 2 月にも海軍による共同演習を実施している。また、中国、ロシア、イラン海軍も、2019 年 12 月にオマーン湾で多国間共同演習を実施した。その後も三か国海軍は 22 年 1 月、同年 9 月に共同演習を

実施している。今後は SCO と BRICS のメンバー国を中心に、中露とともに共同演習に参加する国が増加する可能性もあるだろう。

すでに指摘したように、中国がロシアとの共同軍事演習を通じて、自らの能力の向上を目指していることは明らかである。1979 年の中越戦争以来、40 年以上にわたって本格的な実戦経験のない人民解放軍にとって、統合的な作戦を戦場で実践してきたロシア軍から学べる点はいくつもあるだろう。ロシアの西部や中央アジア、欧州の海域などで行われる共同軍事演習に参加することは、人民解放軍の戦力投射能力を強化し確認するうえでも有用である。中国は、自らの軍事的能力を強化することを目指して、ロシアとの共同軍事演習の内容をさらに拡大していくことが想定される。例えば中露は 2016 年 5 月に、コンピューターシミュレーションによるミサイル防衛に関する共同演習を実施した。この演習は、防空およびミサイル防衛における中露の相互運用性の向上を目的とし、ミサイル発射に関する早期警戒システムやミサイルに関するものなど、機微な情報も両国間で共有されたとみられる⁴⁰。中露両国は 2017 年 12 月にも同様のミサイル防衛共同演習を実施した。その後、ミサイル防衛に関する中露の共同演習について公式な発表はないが、中国はミサイル防衛能力の開発を進展させていることもあり、ロシアとのミサイル防衛に関する共同演習が今後も実施される可能性は高いと思われる。また、人民解放軍が重点的に強化を図っている宇宙やサイバー、電磁波といった新領域を既存の共同軍事演習に取り入れたり、こうした能力の強化を目指した新たな共同軍事演習を開始することなども想定される。

中国によるロシアとの共同軍事演習に関するこれまでの議論から明らかなように、中国はロシアとの間の安全保障上の相互不信を乗り越えて、米国をはじめとした西側諸国に対抗するうえで安全保障上の利益を共有するパートナーとしてロシアとの関係を強化している。中露と西側諸国との関係改善が実現しない限り、中露の共同軍事演習は質と量の双方で今後も強化されることになるだろう。ウクライナ戦争においてロシア軍の能力不足が露呈したことで、人民解放軍がロシア軍との共同軍事演習への関心を低下させるとの見方もあるだろう。他方で、西側諸国から提供された先進的な兵器を使用するウクライナ軍と戦っているロシア軍から、人民解放軍が学べる教訓も多いものと考えられる。中国にとってロシアとの共同軍事演習は、戦略的にも戦術的にも重要であり、今後も強化されることになるだろう。

中露による共同軍事演習の拡大は、日本を含む東アジアの安全保障環境を悪化させることになるだろう。ルールに基づく既存の国際秩序に対して、力によってこれを変更しようとする現状変更勢力の中国とロシアが、共同軍事演習を通じて軍事的な連携を強化することは、米国や日本など既存秩序の維持を目指す国々に対して挑戦的な行動をとることにつながりかねない。中露による共同軍事演習は、正式な軍事同盟を宣言せずに、両国間の防衛関係を制度化する手段であるとの指摘もあり⁴¹、今後は中露が連携して現状変更に向けた日本や米国などへの軍事的な圧力を強化してくる可能性も十分に考えられる。こ

うした状況の中でも東アジアの安定を維持するためには、日本は米国やオーストラリア、インド、韓国などの国々に加えて、東南アジアの有志国やヨーロッパのパートナー諸国などとも東アジアにおける共同演習を積極的に実施していく必要があるだろう。既存の国際秩序の維持で利益を共有する多くの国々と共同演習を行うことを通じて、力による現状変更を容認しない現状維持勢力の意思と能力を中露に示すことが、抑止を通じた地域秩序の安定につながるものと思われる。

¹ 「習近平同俄羅斯普京會談」『人民日報』2022 年 3 月 5 日。

² 「中華人民共和國和俄羅斯連邦關於新時代國際關係和全球可持續發展的聯合聲明」『人民日報』2022 年 2 月 5 日。

³ 「2021 年 9 月 國防部 例行 記者 會 文字 實 錄」 國 防 部 網、2021 年 9 月 30 日、http://www.mod.gov.cn/gfbw/xwfy/lxjzhzt/2021njzh/2021n9y/4896269_2.html。

⁴ Paul Schwartz, "Russia-China Joint Military Exercises," Max Bergmann and Andrew Lohsen eds., *Understanding the Broader Transatlantic Security Implications of Greater Sino-Russian Military Alignment* (CSIS, 2022), p. 21.

⁵ 「新時代的中國國防」新華網、2019 年 7 月 24 日、http://www.xinhuanet.com/politics/2019-07/24/c_1124792450.htm。

⁶ Brian Hart and Bonny Lin, "Chinese Strategic View on Join Military Exercises with Russia," Max Bergmann and Andrew Lohsen eds., *Understanding the Broader Transatlantic Security Implications of Greater Sino-Russian Military Alignment* (CSIS, 2022), p. 29.

⁷ 「中俄海上聯合軍事訓練圓滿落幕」『解放軍報』2012 年 4 月 28 日。

⁸ 「中俄海軍黃海大演兵（熱點解讀）」『人民日報』2012 年 4 月 23 日。

⁹ 「海上聯合—2022」：提高務實合作水平 提昇聯合行動能力」新華網、2022 年 12 月 22 日、<http://military.people.com.cn/n1/2022/1222/c1011-32592031.html>。

¹⁰ 「中俄“海上聯合-2022”聯合軍事演習結束」新華網、2022 年 12 月 27 日、<http://world.people.com.cn/n1/2022/1227/c1002-32594788.html>。

¹¹ Brian Hart and Bonny Lin, "Chinese Strategic View on Join Military Exercises with Russia," p. 29.

¹² Ethan Meick, "China-Russia Military-to-Military Relations: Moving Toward a Higher Level of Cooperation," *U.S.-China Economic and Security Review Commission Staff Research Report*, March 27, 2017, p. 9.

¹³ Richard Weitz, "Assessing Chinese-Russian Military Exercises, Past Progress and Future Trends," Center for Strategic and International Studies, July 2021, p. 4, https://csis-website-prod.s3.amazonaws.com/s3fs-public/publication/210709_Weitz_Chinese-Russian_Exercises.pdf?VersionId=sVj9xEhVUrzlMbf5pOdJqAQwUvn2zq.

¹⁴ 防衛省『防衛白書（令和元年版）』（防衛省、2019 年）127 頁。

¹⁵ 「“東方—2018”戰略演習中俄聯合戰役演習正式開始」『人民日報』2018 年 9 月 12 日。

¹⁶ 「“東方—2018”戰略演習中俄聯合戰役演練展開」『解放軍報』2018 年 9 月 12 日。

¹⁷ 「魏鳳和率團觀摩俄“東方—2018”戰略演習」『解放軍報』2018 年 9 月 14 日。

¹⁸ 小泉悠「事後検証：ロシア軍秋季大演習『ヴォストーク 2018』」国際情報ネットワーク分析 IINA、2018 年 10 月 10 日、<https://www.spf.org/iina/articles/koizumi-russia-boctokpost.html>。

¹⁹ 鈞和「努力開創新時代大國演兵新境界」『解放軍報』2022 年 8 月 11 日。

²⁰ 姚磊、程毅「真聯實練砺精兵」『解放軍報』2022 年 8 月 13 日。

²¹ 防衛省『防衛白書（令和 4 年版）』（防衛省、2022 年）9-10 頁。

²² 「“東方—2022”演習正式開始」『解放軍報』2022 年 9 月 1 日。

²³ 統合幕僚監部「ロシア及び中国海軍艦艇の動向について」2022 年 9 月 4 日、https://www.mod.go.jp/js/pdf/2022/p20220904_01.pdf。

²⁴ 「“東方—2018”戰略演習中方總導演介紹演習成果」『解放軍報』2018 年 9 月 14 日。

²⁵ Richard Weitz, "Assessing Chinese-Russian Military Exercises, Past Progress and Future Trends," p. 4.

²⁶ 統合幕僚監部「中国機及びロシア機の東シナ海及び日本海における飛行について」2019 年 7 月 23 日、https://www.mod.go.jp/js/pdf/2019/p20190723_01.pdf。

²⁷ 「中俄首次聯合戰略巡航提昇兩軍戰略協作水平」中国国防部ホームページ、2019 年 8 月 29 日、

<http://www.mod.gov.cn/gfbw/xwfy/rcfb/4849376.html>。

²⁸ 「轟 6K 殲 16 運油 20 参加中俄聯合巡航」新華網、2022 年 12 月 1 日、http://www.news.cn/mil/2022-12/01/c_1211705969.htm。

²⁹ 「中俄兩軍進行聯合空中戰略巡航」新華網、2022 年 12 月 1 日、http://www.news.cn/mil/2022-12/01/c_1211705907.htm。

³⁰ 岩本 広志「中露共同飛行：軍事面での一体化が進行」NIDS コメンタリー第 252 号、2023 年 1 月 10 日、<http://www.nids.mod.go.jp/publication/commentary/pdf/commentary252.pdf>。

³¹ 統合幕僚監部「中国軍機及びロシア軍この動向について」2023 年 6 月 7 日、https://www.mod.go.jp/js/pdf/2023/p20230607_02.pdf。

³² 「中俄首次海上聯合巡航圓滿結束」『解放軍報』2021 年 10 月 24 日。

³³ 統合幕僚監部「ロシア海軍艦艇の動向について」2022 年 7 月 4 日、https://www.mod.go.jp/js/pdf/2022/p20220705_02.pdf、防衛省「中国海軍艦艇の動向について」2022 年 7 月 4 日、<https://www.mod.go.jp/j/press/news/2022/07/04a.pdf>。

³⁴ 『読売新聞』2022 年 9 月 30 日。

³⁵ 「国防部：中俄兩軍將開展第 3 次海上聯合巡航」人民網、2023 年 7 月 26 日、<http://military.people.com.cn/n1/2023/0726/c1011-40043988.html>。

³⁶ “Russian, Chinese Warships Operated Near Alaska, Say Senators,” USNI News, August 6, 2023, <https://news.usni.org/2023/08/06/russian-chinese-warships-operated-near-alaska-say-senators>.

³⁷ 統合幕僚監部「中国及びロシア海軍艦艇の動向について」2023 年 8 月 17 日、https://www.mod.go.jp/js/pdf/2023/p20230817_01.pdf。

³⁸ 「中俄兩國國防部長舉行視頻通話」『人民日報』2021 年 11 月 24 日。

³⁹ “China-Russia-South Afrika Conduct Live-Fire Exercise,” China Military Online, November 29, 2019, http://eng.chinamil.com.cn/CHINA_209163/TopStories_209189/9686187.html.

⁴⁰ Ethan Meick, “China-Russia Military-to-Military Relations: Moving Toward a Higher Level of Cooperation,” pp. 11-12.

⁴¹ Richard Weitz, “Assessing Chinese-Russian Military Exercises, Past Progress and Future Trends,” p. 3.

PROFILE

飯田 将史

地域研究部中国研究室 室長

専門分野：中国の外交・安全保障、東アジアの国際関係

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3260-3011

代 表：03-3268-3111（内線 29177）

防衛研究所 Web サイト：www.nids.mod.go.jp